

書評

アメリカ人日本研究者(文化人類学)の
フィットネス関係論文を読んで平 沢 信 康
(体育学講座)

米国における日本研究には、すでに一世紀以上にわたる歴史と伝統がある。日本史研究や宗教研究、また文学研究については、すでに成熟の域に達しているといえよう。こうした分野のほか、近年では、労働、産業、経営、教育など、日本社会の様々な側面に興味をもって着眼する研究者たちが現れ、日本研究も内実が多様化してきている。そうした領域の多彩化のなかでも、アカデミックなディシプリンを具えた米国の日本研究者が我が国の体育やスポーツに関するテーマに取り組む例は、管見の限り稀である。

ミシガン州カラマズー Kalamazoo, Michigan にある西ミシガン大学 Western Michigan University に勤務するローラ・シュピルヴォーゲル Laura Ginsberg Spielvogel 教授が書いた日本のフィットネス研究についての論文は、そうしたなかで例外的な研究といえよう。彼女の論文「THE HARD WORK OF WORKING OUT — Defining Leisure, Health, and Beauty in a Japanese Fitness Club」は、『Sport & Social Issues (スポーツと社会問題)』第24巻第3号(2000年8月)に掲載されたもので、1996年から翌年にかけての11ヶ月間、日本の2つのフィットネスクラブで余暇・健康・ダイエット・美意識について行った調査に基づいて執筆された。

彼女のアカデミック・キャリアを見ると、デューク大学で比較領域研究と美術史を学び、その後イェール大学の大学院に進んで人類学の学位を取得している。専門は文化人類学とジェンダー人類学である。アメリカにおける日本研究の古典『菊と刀』の著者ルース・ベネディクト女史が文化人類学者であったように、彼女も文化人類学者である。1998年からジェイムズ・マディソン大学助教授として赴任し、2000年に西ミシガン大学に転じ、現在、同大学人類学部の教授として教鞭をとってい

る。日本語のほか、スペイン語も理解できるとのことである(大学在学中の1990年夏、スペイン美術史と文化を学ぶためにマドリッド大学で海外研修を行なっている)。

ハーヴァード大学のライシャワー日本研究所 The Edwin O. Reishauer Institute of Japanese Studies が若手日本研究者に提供しているポストドクトラル・フェローシップという制度がある。これは、Ph. D を取得してまもない優秀な研究者に、博士論文を出版可能な原稿に仕上げるための資料と機会を一年間にわたり提供するものであり、アメリカ合衆国における若手日本研究者のための、いわば《登竜門》ともいうべき制度である。結婚前のローラ・マクギネスは、同研究所のフェローとして研修する機会を得、その成果を、2000年春のジャパンフォーラム・イベント(同研究所主催で毎週金曜日午後4時から5時半までクーリッジホールのセミナー・ルームで公開)において、Disciplining the Body in a Japanese Fitness Club(日本のフィットネス・クラブにおける肉体の鍛錬)をテーマとして発表している。この記事を、報告者はハーヴァード大学での在外研修の際に研究所発行のニュースレター『通信』の中に発見したので、研究所秘書に彼女の連絡先を教えてもらい、後日、本人より論文を恵送された。以下、同論文の要旨を紹介し、あわせて感想を述べたい。

日本の戦後経済の驚異的な成功は身体的に健康な労働力のたゆみなき努力のうえに築かれた。1980年代におけるフィットネスクラブのブームは、国民の健康を増進させ、高齢に至ってもなお頑健かつ行動的で自立した生活を維持できる人口割合を高めようとする国の健康政策と合致していた。余暇の増大と健康的なライフスタイルを求める国民意識の向上からみて、フィットネスクラブは日本において成功するであろうと期待されたが、実際にはそうならなかった。

健康な体づくりは経済不況を乗り切っていくうえでも重要であるが、企業経営者たちや政府の官僚たちは、会社の被雇用者のみならず高齢者や乳幼児に健康と高水準のフィットネスを維持するこ

とが経済の活力をも保証するものと認識している。しかし、日本人の約97%は、週2回以上運動をしておらず（『レジャー白書 1996』）、驚くべき速さで会員がクラブをやめているという。日本には精励と勤勉の伝統や、努力鍛錬に報いる文化的業績システムが存在するため、たしかに幾割かの会員は体重を落として健康増進を達成するために強い身体をつくるというレトリックを進んで受け入れているが、多くの人はエアロビクス・スタジオで汗をかいた後サウナで汗を流す方を選んでいる。

東京の下町の中心部にあるダウントウン・フィットネスと千葉クラブの両クラブにおいて正規スタッフとして雇用されたローラは、スタッフの制服を着ることによりクラブ会員やスタッフメンバーと密接な関係を築く機会を与えられ、クラブ会員やインストラクター、経営者へのインタビューを行なっている。

二つの一般的なヘルスクラブ・チェーンでの参与観察に基づいて、論文はフィットネスクラブとレジャー産業やダイエット産業との競合関係を説明している。よりよい健康と容貌、ストレス発散とリラクゼーションといったレトリックを用いることによって、フィットネスクラブは、ゴルフやデパートに向う人々や居間でテレビを視聴している人々から顧客を獲得しようと努めると同時に、エステティック・サロン、ファッション雑誌、隆盛をきわめる美容ダイエット産業と競争しなければならぬ現況を記述している。数多くの余暇産業があるなかで、フィットネスクラブは会員獲得と生き残りをかけて、ラウンジでのアイスクリームやビールのサービス、エクササイズ後のパーティの主催、ゴルフ練習場と素振り講習、別途料金での旅行の主催（スノーボード、スキー、ダイビング・ツアー、マラソン）、マッサージといったサービスを提供し、クラブによっては深夜まで営業している。

論文は、フィットネスクラブにおいて日本人がハードワークを実行したがるに注目している。日本社会には、「頑張る」や「我慢する」といった態度に、歴史的・制度的な強調がおかれてきたにもかかわらず、日本人がフィットネスク

ラブで肉体を鍛錬する骨折りに尻込みすることは驚くべきことである、としている。しかし、努力しようとならないのは、フィットネスクラブが職場とも家庭とも異なる、社会規範が緩められた第三の空間であるからこそなのであると彼女は観察している。相当高額な料金を支払うことで、メンバーは、空間と時間、そしてオフィスで必要とされる自己卑下、義務的な酒宴あるいは家庭で待ちうけている終わりなき洗濯・買い物・掃除といった世事から解放された新しいライフスタイルを購入する。そのため、日本のフィットネスクラブでは、リラクゼーション、個人的享受、気まま、最低限の努力というものに、サービス・スタッフは優先順位をつけているのである。

日本の会社は仕事がついで、多くのサラリーマンとオフィスレディーが仕事以外の時間にリラックスすることを優先するというのは驚くべきことではない。疲れ果てた会員を土曜日の午後、ジムに誘うのは困難である。そのため日本のフィットネスクラブは、アメリカの場合以上に、リラクゼーションとストレッチングに重点をおいていることが特徴的であると指摘している。クラブには、プロの女性マッサージ師、マッサージ用の椅子、流水プールが用意されている。エアロビクス・クラスの最後10分間、多くのインストラクターは、会員がリラックスするように、足・ふくらはぎ・臀部をマッサージする。ヨガや太極拳を含めて、様々なストレッチングとリラクゼーションのコースがある。

フィットネスクラブが、一種のコミュニティ・センターとして機能していることをも見逃していない。クラスを受け新しいスキルを学ぶ空間は、人と出会い、友人を作る場でもある。フォーマルな場所でないがゆえに、かえってオフィスでよりも深い友情で結ばれ、他人と親しくなりやすい空間となっている。とりわけ高齢の女性会員については、そうしたことがいえ、彼女らがおしゃべりし、互いに「背中流し」をしながら抑制を取り除くことで友情の絆を強める様子を紹介している。

多くの日本人が運動不足になっていることにも言及している。オフィスレディーやサラリーマンの

多くは、1日中、机に向かいコンピュータ画面の前に坐り、階段よりもエスカレーターを使いがちであり、中学校での部活動以来、運動していない。貴重な自由時間は、テレビの前で横になり、あるいは友人との飲み食いに費やされる。若者についても同様で、何時間もコンピュータ画面の前に坐り、ビデオゲームに興じ、ソファーに寝そべってテレビやビデオばかり見、お菓子を食べ、屋外でスポーツやゲームをしない。学生だけではなく10歳ないし12歳の子どもたちでさえ、ますますテレビを見、ビデオゲームに興じるため室内で過ごす傾向がある。日本の青少年は運動しないため、30歳以下の若者はアメリカの若者よりもコレステロール値が高い、という⁸⁾

このように身体活動が全般的に不足している現代のライフスタイルのなかでは、以前ダンベルなど持ったことのない人がクラブに入会してくる。ほとんどの会員は、何か新しいことをすることを躊躇するため、スタッフはクラブ会員を甘やかし、会員が自分自身の可能性を迫るようチャレンジさせることはない。

現代日本においては、若くてプロポーションのよい細身の体という女性美の文化基準が広く行き渡っており、そうしたイメージにむけて女性たちは身体を美しく整えようと努力している。若い女性たちが、こうした基準に自分の身体を合わせようとして、熱狂的ではないにせよ、少なくとも精を出して運動すると思われようが、しかし実際には、ほとんどの日本女性は身体鍛錬の努力をしようとはせず、即効性のあるダイエット、薬、あるいはクリームの方を選ぶ。すみやかにスリムになりバストアップしたいという若い女性の願望を好餌とし、高い美容サロンは2週間ほどで効果が出るなどと広告している。美容補助品店は、マスク、コルセット、過度の発汗を促すため厚い呼吸できない素材でできた自転車用半ズボン、新陳代謝をよくするダイエット薬品、評判の悪い危険なダイエット茶を並べている。庶民的な女性雑誌は全項目を「二度と太らない身体になろう」や「美しいボディをつくる」といった類のトピックに捧げているほどである。

フィットネスクラブは、こうした即効性のある減量方法に対抗して、筋肉づくり、栄養、規則的な運動を処方するのだが、娯楽・リラクゼーション・受身の方法による減量を期待してくる若い女性は自らの身体を動かしたがない。若い女性たちのフィットネスクラブ通いは、しばしば一時的な流行にすぎず、鍛錬の厳しさに耐えられず、わずか2ヵ月後には止めてしまう傾向が指摘されている。

米国とは異なり、日本のフィットネスクラブ会員の多くは激しい心肺運動を好まない。高額な料金を払う常連会員を満足させるため、日本のフィットネスクラブはハードワークをリラクゼーションと愉楽の下に隠さねばならない、と分析している。日本におけるフィットネス人口は約2%に過ぎず、全般的にみて日本人は米国人と比較してフィットネス意識が低い、と評している。

彼女の研究関心は、ジェンダー、身体の人類学、グローバリゼーションと大衆文化、スポーツとレジャー、コミュニティー研究、社会的・国家的・超国家的アイデンティティといったキーワードで示されている。なかでも、現代アジアの大衆文化における美、女性たちの身体づくり、フィットネスと女性らしさ、身体の美意識といった現代日本におけるスポーツと身体文化に研究の焦点があるという。

スピルヴォーゲルの論文の興味ぶかい点は、スポーツ社会学や体育経営管理学を専門とする研究者によるものではなく、文化人類学を専攻する若手アメリカ人研究者による日本のフィットネス研究であることにある。彼女は、日本の文化的価値という社会的文脈のなかに、労働と余暇との間の、また健康と美との間の緊張関係を把握しようと試みている。同時に、エクササイズによる身体鍛錬と女性らしさとの関係、日本における女性美の理想的体型について、ジェンダー社会学的視点から分析している点にもユニークさが認められよう⁹⁾

米国では、宗教学の分野でもジェンダーの視点を採り入れた研究が多いことに、ハーヴァード大学の Divinity School を訪れた際に気づかされたが、

本論文も、一部ではあるが、身体鍛錬と女性らしさとの関係というジェンダー的な観点を採り入れて分析を試みており、筋肉質の身体形成に関する日米女性の美意識の相異にふれている。

本論文が人類学者によって執筆された点はユニークであるとはいえ、内容に関しては、日本人にとっては特に目新しいことを含まない。ことにスポーツ社会学の研究者にとっては既知の事柄に属するであろう。しかし、スポーツ研究へのジェンダー的観点の導入は示唆的である。本学の大学院生のなかから、ジェンダーの視点から切り込んだ優れた研究が現れることを期待したい。

ちなみに、ライシャワー日本研究所での研修最後に発表された彼女の原稿は、ハワイ大学出版会から出された以下の近刊書の中に収められているので、併せて参照されたい。

The Sporting Life: Sports and Body Culture in Modern Japan, William Kelly and Atsuo Sugimoto, eds.

なお、彼女はカリフォルニア大学出版会から単著 *Fitness and Femininity: Discipline and Display of the Female Body in Contemporary Japan* の出版契約を結んでいることを付記しておく。